



Title	宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界：『櫂』・『春燈』・『岩佐覚え書』・『寒椿』を中心に
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 176, 63 (右) -93 (右)
Issue Date	2025-07-28
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.176.r63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95789
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_176_Mizutamari.pdf



宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

——『權』・『春燈』・『岩佐覺え書』・『寒椿』を中心に

水 溜 真由美

一 はじめに

日本近代文学史上、花柳界を描く小説は枚挙に暇がない。とはいえ、その圧倒的多数は男性作家の筆によるものである。その理由は、男性作家が客として遊廓や花街に日常的に出入りし、芸娼妓と深い関係になることが珍しくなかったのに対して、女性作家のほとんどは、それらの場所に足を踏み入れることさえなかったからである。もちろん、小説は虚構である以上、実体験がなければ書けないというものではない。たとえば、現代の作家が綿密な調査を行ったうえで、数百年以上前の出来事を素材として優れた歴史小説を書くことは可能である。

とはいえ、実体験が作品のリアリティを保証するという面がないわけではないし、そもそも知る術のない素材につ

いて書くことは難しい。芸娼妓でない女性が花柳界に接点を持つことは極めて困難であつたうえに、芸娼妓に対する根深い差別は彼女たちの体験を語られにくいものにしていた。他方で、芸娼妓を含む「遊女」*¹について語るとは今日に至っても強い政治性を孕んでいる。「遊女」稼業には様々な偏見がつきまとううえ、小説の素材として取り上げられがちな「遊女」と客との関係は（どこまでが「仕事」の範囲であるのか曖昧な場合も少なくない）、しばしば強制的なのか打算の同意なのか恋愛なのか多様な解釈が可能である。これらを考慮すると、「遊女」と親しく接しているからといって、男性作家が描く「遊女」の姿が、どれほど「遊女」の側の真実に根ざすものであるのかは疑わしい。

「遊女」を描く女性作家の作品は限られるが、男性作家と比べて女性作家は「遊女」をめぐる認識の限界に自覚的であつたように思える。そもそも遊廓や花街や私娼街を気軽に訪れることのできなかつた女性作家は、「遊女」を描く際、どのような視点から何を書くかについて注意深い選択を行わざるを得なかつた。

たとえば、岡本かの子「老妓抄」は、冒頭と末尾に「老妓」の和歌の手ほどきをする岡本の分身らしき人物が登場する額縁構造をとりながら、経済的に自立している年増芸妓の私生活を描いている。幸田文『流れる』は、幸田が芸妓置屋で女中を行った体験に基づく作品であり、女中の視点から芸妓置屋の女将と芸妓たちの日常生活を描き出す。

芝木好子『洲崎パラダイス』^{*2}は、特飲街の入り口付近にある飲み屋を舞台にして、特飲街で働く女性（及びその予備軍）と客の姿を描く作品である。

これらの作品は、「素人」の女性がアクセス可能なプライベートな領域や周縁的な空間から「遊女」の世界にアプローチする。作中に作者の分身を登場させる設定は、「遊女」を描く視点に自覚的であろうとする身振りともし解釈できる。^{*3}ところで、花柳界を描いた著名な女性作家の一人に宮尾登美子がいる。宮尾は一九二六年、高知市の芸娼妓紹介

業を営む家庭に生まれた。宮尾は『權』を始めとする多くの作品において家業の芸妓娼妓紹介業や花街を描いた。虚構性の強い『陽暉楼』を除いて、それらのほとんどは自伝的な作品である。

本稿では、宮尾の自伝的作品として、宮尾の養母をモデルとする喜和を視点人物とする『權』、宮尾自身をモデルとする綾子を視点人物とする『春燈』、宮尾の父をモデルとする岩伍の一人称小説である『岩伍覚え書』、幼少期に宮尾と一緒に生活した四人の「仕込みの子」（芸妓の見習い修行をする子）をモデルとして彼女らの人生をオムニバスの描く『寒椿』に着目したい。芸妓娼妓紹介業を営む家庭で育った宮尾は、先ほど言及したどの女性作家とも比べものにならないほどに「遊女」の世界と深く関わった。とはいっても、宮尾にも宮尾の養母にも「遊女」稼業の経験はない。そのことを反映して、喜和と綾子を視点人物とする『權』と『春燈』は、物語の視点を「遊女」の世界の外側においている。しかも喜和は、ことある毎に「素人」の世界と「玄人」の世界の間に境界を見出そうとする。宮尾をモデルとする綾子と『寒椿』の悦子は、「遊女」としての人生を歩む四人の「仕込みの子」と自身の差異を強く意識している。^{*4}

こうした姿勢は、多くの女性作家が「遊女」を描く際に自身と「遊女」を区別する態度と似ているが、両者の間には差異も存在する。「遊女」の世界と限られた接点しか持たなかった多くの女性作家と違って、喜和や綾子（『寒椿』では悦子）は「遊女」の世界であるところの花街に生活基盤^{*5}をおいている。喜和や綾子（悦子）が「遊女」との間に見出す境界は花街の内部にある「素人」と「玄人」の間の境界であり、その境界は階級格差を背景とする女性内部の分断に連動している。一方で、芸妓娼妓紹介業の主たる担い手である岩伍や息子の健太郎（綾子の異母兄）は、「玄人」の世界の内側に身をおいている。とはいえ当然ながら、「遊女」の性的サービスを客に買わせる立場にある「女街」と、

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

客に性的サービスを提供する立場にある「遊女」との間には、決定的な立場の相違が存在する。

本稿では以上のような観点をふまえながら、宮尾の自伝的小説において花街の中の境界がどのように描かれているのかを考察したい。またそのことを通じて、宮尾の自伝的小説を「遊女」を描く女性作家のユニークな試みの一つとして位置づけたい。

二 自伝的作品の概要——『櫂』・『春燈』・『岩佐覚え書』・『寒椿』

先述のように、宮尾登美子は一九二六年に高知市の芸妓娼妓紹介業を営む家庭に生まれた^{*)}。宮尾は父の岸田猛吾とその愛人である女義太夫の芸人との間に生まれた子であり、宮尾の実母は宮尾を出産した後すぐに宮尾を猛吾とその妻である喜世に託して宮尾の許を離れた。宮尾は養母の喜世に深く愛されて育ったが、養母と父親は一九三八年に離婚した。その後、宮尾は短期間養母の下で暮らしたものの、まもなく別の愛人と、その愛人の二人の連れ子と共に暮らす父親の許に移った。一九三九年四月、宮尾は高知県女子師範学校附属小学校高等科に入学した。翌年四月、高坂高等女学校に編入学。一九四三年四月、同校家政研究科に進学。同年一二月に、同校を中途退学して代用教員（助教）として吾川郡池川町（現・仁淀川町）の安居国民学校に赴任。一九四四年二月、池川町狩山国民学校に転任するが、まもなく退職して結婚する。結婚相手は安居国民学校の同僚だった。一九四五年二月、長女出産後まもなく、前年秋より「満州」で大土佐開拓団の子女教育に従事し一時帰国していた夫と共に「満州」に渡った。敗戦後の一九四六年九月、親子三人で日本に引き揚げた後は、吾川郡弘岡上ノ村（現・高知市）の夫の実家で暮らしたが、肺結核を患い

長期の療養生活を余儀なくされた。一九五一年から五八年まで村立保育所に保母として勤務。一九六〇年代初め頃から作家活動を本格化させるが、文壇で華々しく活躍するようになるのは、離婚・再婚・上京を経て、一九七二年八月に出版された私家版『權』が脚光を浴び、太宰治賞を受賞した後のことである。

以下では本稿の考察対象である『權』、『春燈』、『岩佐覚え書』、『寒椿』の概要を説明する。^{*7}

『權』は自伝四部作（『權』、『春燈』、『朱夏』、『仁淀川』^{*}）の第一作であり、喜和を視点人物として、喜和と岩佐の結婚生活を描く作品である。元々博奕打だった富田岩佐は結婚後一〇年ほど経った後、「南海随一の料亭」と言われた陽暉楼の主人の後ろ盾を得て芸妓娼妓紹介業者となる。喜和は夫の仕事に対する嫌悪感を払拭することができず、そのことが夫婦の溝を深めていく。喜和と岩佐の間には龍太郎と健太郎という二人の息子がいたが（龍太郎は二四歳の時に肺結核により死去、健太郎は陽暉楼のお抱え運転手を経て岩佐の仕事を手伝うようになる）、岩佐が女義太夫の巴吉との間に綾子をもうけ、綾子を夫婦の子として育てる決断をしたことで夫婦関係に危機がせまる。当初岩佐の決断に強く反発した喜和は、やがて綾子を実の娘のように可愛がるようになり、夫婦の危機は去ったかに見えた。しかし、岩佐が四人の「仕込みの子」を世話することになったことから喜和の芸妓娼妓紹介業に対する嫌悪感が募っていき、遂に夫婦は離婚する。離婚時、岩佐は喜和とほぼ別居状態にあり、すでに愛人の照と照の二人の連れ子と共に暮らしていた。岩佐よりも喜和を慕っていた綾子は、両親の離婚に際して喜和と暮らす選択をするが、やがて周囲の説得に屈して岩佐の許に移る。他方で、喜和は、うどん屋の女将として新しい人生を歩み始める。

『春燈』は綾子の視点で書かれる文字通りの自伝的小説である。『春燈』の序盤では、『權』の後半でも扱われる綾子の幼少期が綾子の視点から語られる。やがて喜和と別れ岩佐と暮らすようになった綾子は女学校（第一高女）の入学

試験に失敗して高知県女子師範学校付属小学校高等科に入学し、さらにその二年後、高坂高等女学校三年次に編入する。女学校卒業後には東京の女子大に進学することを希望していたが、岩伍に強く反対され、やむなく高坂高等女学校の補修科（家政研究科）に進学する。しかし家を離れるために国民学校の代用教員になることを思い立ち、女師付属時代の恩師のツテで山間部の学校に職を得る。最初に赴任した安居国民学校での任期を終えた後は狩山国民学校に転任するが、まもなく前任校の同僚の三好要からの結婚申し込みを受ける。岩伍は、要の実家が農家であることなどを理由に二人の結婚に反対するが、家を出たい一心の綾子は岩伍を説得しようとする（『春燈』の続編に当たる『朱夏』の冒頭で二人は結婚する）。

『岩伍覚え書』は宮尾の父をモデルとする岩伍が読者に語りかけるスタイルで書かれた一人称小説であり、「三日月次郎一件について」、「すば抜きについて」、「満州往来について」、「博徒あしらいについて」の四編からなる。^{*9}宮尾は父の猛吾が一九三七年から一四年間に渡って日記と営業日誌をつけていたことを随所で語っており、『岩伍覚え書』は、この営業日誌から素材を得た作品である。^{*10}『岩伍覚え書』には『權』や『春燈』では詳しく扱われることのなかった「遊女」の世界が、芸妓娼妓紹介業者である岩伍の視点から描かれている。

『寒椿』は宮尾が小学生の頃に一緒に生活していた四人の「仕込みの子」をモデルとして四人の人生の軌跡をたどるオムニバスの作品であり、一章「小奴の澄子」、二章「久千代の民江」、三章「花勇の貞子」、四章「染弥の妙子」からなる。^{*11}各章の主人公である澄子、民江、貞子、妙子は、小学生の頃に芸妓娼妓紹介業者の傍ら芸妓子方屋を営む松崎に買われ、松崎夫妻の世話を受けながら松崎の娘の悦子と姉妹のようにして育った。しかし、小学校卒業後は、山海楼を皮切りに本格的に「遊女」としての人生を歩む。もっとも、その後の四人の人生は——妙子以外の三人が「満州」

の店に住み替えるなど、ある時期まで共通した軌跡をたどるもの——銀行の頭取の「二号」となった澄子、五〇代になった現在も芸妓を続ける民江、敗戦後すぐに「満州」からの引き揚げ船の中で知り合った大工の妻となり三人の子供をもうけながらも二八歳で亡くなった貞子、不動産会社の社長夫人となった妙子、と多様である。

『寒椿』において物語の現在は、この作品が書かれた一九七〇年代半ば頃に設定されており、一章には、階段から落ちて半身不随になった澄子を見舞うために、民江、妙子、悦子が久しぶりに再会する場面が描かれている。四章とも三人称小説のスタイルをとるものの、物語の現在から二〇年以上前に他界した貞子を主人公とする三章を例外として、概ね一章は澄子、二章は民江、四章は妙子の内面に焦点化される。ただし、現在は作家となっている悦子の内面に焦点化される場面もあり、そうした場面において悦子は自身と「仕込みの子」との関係性を反省的に捉え直す。なお、三章は主として悦子の視点から語られるが、悦子が語る貞子の人生は、部分的に、悦子が貞子の母ハルエの従姉妹である玉枝を老人ホームに訪ねて聞き取った内容に依拠している。

三 花街の中の境界

花柳界のビジネスは、業者（以下、楼主を含めて「女街」とする）が客に対して、芸娼妓（以下、「遊女」とする）の性的サービスを金銭を対価として提供することによって成り立っている。花柳界において男女の関係は圧倒的に非対称的である。「客」は男性、「女街」も多数は男性、「遊女」は女性である。もちろん、性産業全体に視野を広げなれば、男性労働者が男性客に対して性的サービスを提供するビジネスも存在するし、近年は、ホストクラブなど女性

客に対して男性労働者が性的サービスを提供するビジネスも増えている。けれども、伝統的な花柳界においては、ほとんどの場合、客は男性であり、性労働者は女性であった。他方で、伝統的な花柳界においても、女性の「女衞」は少なからず存在する。たとえば、『權』に登場する大貞は大貞楼の女将であり元娼妓である。花柳界や性産業のシステムを考える上で女性の「女衞」の存在は無視できないが、本稿では扱わない。

ところで、宮尾の自伝的作品は芸妓娼妓紹介業者とその家族の物語である。見てきたように、『權』は喜和、『春燈』は綾子を視点人物とする三人称小説、『岩伍覚え書』は岩伍の視点による一人称小説、『春椿』は澄子・民江・妙子・悦子を視点人物とする三人称小説である。これらの人物の立場は、芸妓娼妓紹介業者の岩伍（『寒椿』では「お父さん」）は「女衞」、喜和（『寒椿』では「お母さん」）は「女衞」の妻、綾子と悦子は「女衞」の娘、澄子・民江・貞子・妙子は「遊女」である。さらに、これらの作品には、岩伍（「お父さん」と喜和（「お母さん」）の息子で綾子（悦子）の年の離れた異母兄である健太郎（『寒椿』では勇太郎）も登場する。健太郎（勇太郎）は長じてから芸妓娼妓紹介業を営む岩伍の右腕になる人物であり、「女衞」の息子にして「女衞」である。

なお、「女衞」の妻にあたる喜和や「女衞」の娘である綾子・悦子は、芸妓娼妓紹介業から得られる収入で安定した生活を享受しているものの、喜和による「内助の功」を別とすれば、芸妓娼妓紹介業に深く関与しているわけではない。本稿では、花柳界において「客」に「遊女」の性的サービスを提供する「女衞」と自らの身体や性的サービスを提供する「遊女」を「玄人」として位置づけるが、「女衞」の妻や娘は「玄人」の枠からはみ出す存在である。

喜和は「素人」と「玄人」の境界に敏感であり、「玄人」の世界を深く嫌悪しているが、そうした感じ方は喜和の潔癖さのみでなく、「玄人」の世界における女性の立場性にも起因している。前述したように、花柳界の主要なアクター

は「客」と「女衞」と「遊女」である。「客」は男性、「女衞」も多くは男性であるため、「遊女」でない女性の多くにとって「玄人」の世界には居場所がない（女性の「女衞」も、『權』の大貞のように元「遊女」であることが少なくない）。

『春燈』には、小学生の綾子が健太郎の妻の小夜子から「兄さんがね。あんたを芸者に売ろうかといいうけん」と言われ、「たとえようもないほど」の驚きと恐怖を感じる場面がある（『全集』第二巻、九三頁）。この発言は小夜子の「出まかせ」にすぎなかったのだが、綾子はこの発言によって、「怠ければ、或は間違ったことをすれば、自分を待っているものは直ちに芸者への転落だと思う気持が、生涯体のなかに消え難い烙印として残された」（同、九五頁）と述べている。しかし裏を返せば、このことは、花街で生活していても、綾子が「玄人」ではないことを裏書きしている。他方で、綾子と同じく岩伍の子である健太郎は、そもそも「芸者に売られる」可能性はない。それどころか健太郎は「女衞」の手引きにより花街の「客」となり、その延長線上で「女衞」になる。

以上の点をふまえがら、四節では喜和、五節では綾子・悦子、六節では岩伍・健太郎に着目して、花街における「素人／玄人」の境界について考察したい。

四 喜和——「女衞」の妻

『權』は芸妓娼妓紹介業者である岩伍の妻である喜和の物語である。物語の終盤で喜和と岩伍の夫婦関係は破綻するが、その最大の原因は、喜和が芸妓娼妓紹介業に対して嫌悪感を抱き、その思いを折りに触れて岩伍にぶつけたた

めである。喜和は息子の健太郎を介して岩伍から離縁を言い渡されるのだが、その理由として、「喜和が岩伍の仕事を嫌がる様子を露はにするにつれ、岩伍は喜和を自分のよき協力者として見る事は出来なくなり、今では気持も遠く離れ去つてゐる」という趣旨の説明を受ける（『全集』第一巻、三三九頁）。

喜和が芸妓娼妓紹介業を嫌悪する理由については後ほど論じるが、作中では喜和が「玄人」の世界を嫌い、「玄人」の世界に馴染もうとしない様子がくり返し描かれる。喜和は岩伍が女義太夫の芸人との間に子供をもうけた際に仲裁役を買って出た大貞楼の女将の大貞から、「この世界、素人でもたまに見ん事もないけど、皆早うに水に馴れてひとりで垢抜けて捌けて来るもんや。あんただけや。年喰うてくるくせに未だに子供で、気は利かんし慥気はこくし洒落も遅い」（同、一六九頁）と嫌味を言われる。

喜和は当初から芸妓娼妓紹介業の仕事を嫌っていたが、とりわけ四人の「仕込みの子」を世話するようになってから、家の中が「玄人」の世界に侵食されていくのを感じ取り、強い疎外感を抱く。長くなるが関連箇所を引用する。

子供等がこの家へ来てからと云ふもの、開業以来の富田の雰囲気はがらりと変つて了つた。と喜和はときどき、冷たい他所者の目になつて家中を見渡す事もあつた。

玄人の家ではあつても三昧の音の響かぬが自慢だつたのに、今は店の書類棚の脇にかうきの棹にくわりんの胴、と云ふ、ものの良い三昧線が三挺も掛かり、午後になると稽古から戻つた誰ぞが懸命で弾く、たどたどしい音締めが二階から聞えて来る。三昧線の脇の小物棚には稽古用の木撥、上物の象牙撥や上駒下駒、取替え用の糸の箱、赤い毛糸の指嵌め、滑り止めのゴムなど付属品一式から、舞扇、縮緬手拭、絹傘まで、鮮やかな色目が並んでゐ

る。

京町の呉服屋かめやの番頭も、緑町に倍して頻繁に訪れて来るやうになり、子供達の普段着には可愛らしい真岡木綿の花柄を、稽古に通ふ長袖には大幅物のモスリンか銘仙を大凡選んで運んで来、此の頃では真先に披露目をする筈の美代子の座敷着にと、錦紗縮緬の上物も混て来る。半幅に畳み、色糸で綴じた常着の反物にはさう騒がない子供等も、軸に巻いた柔らか物を広げるときには鈴や勝まで巻き込んで店の間に垣を作る。

(中略)

喜和は、この子等の取締りもかう云ふ衣裳選びまでが境で、それ以上は手幅^{てはば}に叶はぬ、とほとほと思へる。何よりも置屋の真似事は嫌ぢやと思ふ氣持が先に立ち、隣の大西「芸妓子方屋——引用者注」の姐さんのやうに炊事場に居ても稽古三昧線に耳を澄ませてゐて、

「お前、調子の合うて無い事が判らんかね。二上りやら三下りやら判らんものを弾いて」

と常住手離さぬ先のちびた矩尺^{かねぢし}で仕込みの子の撥を持つ手をぱんと打^しく、そんな癖が喜和に出来る筈もないし、第一余程の狂ひでなければ三昧の調子など聞分^きけられないのであつた(同、二九九—三〇〇頁)。

右の引用からうかがえるように、「遊女」の経験を持たない喜和にとって芸妓娼妓紹介業の仕事は手に余るものだった。『岩佐寛え書』には、「私の女房喜和は根っからの素人^{すじん}の出でありまして、かねがねいくら教えてもこの商売の裏表が呑み込めませず、それならそれでいつそ「お前は釜屋番」とし、店の話はこちらからしめせず向うから聞きませず^せに過^すごして来た」とする記述がある(『全集』第四卷、二二頁)。「權」によると、岩佐の仕事に対する喜和の「手助

け」は「家の内の宰領と、一つ踏出しても妓の親達への手入れでしかなかった」(『全集』第一巻、三三六頁)。もっとも、岩伍の内縁の妻となる照についての「岩伍の云付け通り走り使ひもし、妓達を連れて県外へも行き、楼主とも云ひ、益さん長さん」[男性の使用人―引用者注]並みによく働いてゐる」(同、三三六頁)という記述をふまえると、岩伍は「釜屋番」に甘んじる喜和の態度に不満を持っていた可能性が高い。岩伍は、健太郎に「家の商売を手伝はす」ことに喜和が反対した際、「何度云うたら判る。／男の仕事に女子が口を出すなどあれば云うてある。手伝ひ一つ出来んくせに」と言つて喜和を怒鳴りつける。この時、喜和は「手伝ひと云ふのはお照の事です。／私にお照の真似をせよと云ふがですか」と口答えして、岩伍から頬を叩かれる(同、三三五頁)。

ところで、喜和が芸妓娼妓紹介業を嫌悪する最大の理由は、「女子の売買の上前を刎ね、それで太平無事に暮してゆくことに良心の呵責を覚えるためである。喜和は「紹介人の金」を「生き身の女子を地獄へ突落とした手でせしめる汚れた報酬」のように感じている(同、三七頁)。他方で、岩伍は芸妓娼妓紹介業に「人助け」の意義を見出す。岩伍が芸妓娼妓紹介業の拠点とした緑町には「高知市一といふ札付きの貧乏長屋」(同、五三頁)があり、岩伍には「裏町の惨めな暮しの人達を少しでも救上げたい」(同、三七頁)という強い思いがあつた。岩伍は喜和に対して次のように述べる。

「お前は知るまいが、裏町の長屋には今日の口過ぎくんじちにも困る人間がとつさり居る。親の困窮を見て、娘が我が身を売つてでも助けるのはこれは当然の事。さういふとき、紹介人の働きが無うては貧乏人は浮び上れまい。云うてみりやこれは人助けの仕事かも知れん。」(同、三八頁)

右のような発言は偽善的にも感じられるが、岩伍は、しばしば損得勘定を二の次にして「遊女」の面倒を見る。『岩伍覚え書』において、岩伍は「本人の前借に余程余裕のある場合を別にして、よんどころのない身売りの妓供からは、手数料は一銭たりとももらってはおりません」（『全集』第四卷、一七一―一八頁）と断言している。『寒椿』一章には、「仕込みの子」の一人である澄子が山海楼から巽楼に住み替える時、「お父さん」が最初に澄子を引き受けた時の「身代金三百円の貸金証文」を「ちりぢりに引き裂いて傍らの火鉢にくべ」、「さ、これでお前は儂に一文の借金もない身になった。あとあと気兼ねは要らん」と言い渡す場面がある（同、二〇四頁）。澄子は巽楼に住み替えてから「お父さん」の良心的態度の有り難みを身にしみて感じる。

『權』には、喜和が「仕込みの子」に対する岩伍の情け深い態度をふまえて、「男の三十四十を「情ざかり」と云ひ、女房以外の女にまで情を掛け易くなる状態をさう云ふけれど、岩伍の場合は三十四十どころではなく、一生殆ど情ざかりなのではあるまいか」と考える場面もある（『全集』第一卷、二九六―二九七頁）。

だからといって喜和は芸妓娼妓紹介業を「人助け」とみなす岩伍の考え方に共感するわけではない。そもそも「素人の出」の喜和には、娘が身売りして貧しい家族を養うことを「当然の事」だとは思えなかった。喜和の実家は慎ましい古物商であり、「商売枯れの時期など、朝飯は麦の粥に醬油しやうゆの実だけがつつと続」くことさえあったが、「自分が身売して家を救はうなどと考へた事もなかつたし、（略）梅「喜和の母―引用者注」もさういふ親孝行の望みを喜和に抱いた事は恐らくなかつた」（同、三八頁）。そのため、岩伍が裏長屋に住むお卷さんの娘の豊美を陽暉楼に世話した時、喜和は、お卷さんが「顔見世」のために「悪びれもせず」豊美を店に連れて来て、「遊山か何ぞの打合せのやうに楽しげ」に話す様子を見て、「このひとは我が子売つて嬉しいのであらうか、と呆れ」、お卷さんを「ひとりでに詰なづ

るやうな目付き」で凝視する（同、四九―五〇頁）。

もつとも、親が娘を身売りする最大の原因は家庭の経済的困窮である。スペイン風邪が流行した時、岩伍は喜和に裏長屋に住むお卷さんの元に米一升を届けるよう言いつけるのだが、裏長屋を訪れた喜和は想像を絶するほどの困難な暮らしぶりを目の当たりにして怖気をふるい、逃げ帰ってしまう。この経験から、喜和は「似非貧乏人のやはな暮し振りなどども傍へも寄れぬこと」（同、六〇頁）を思い知る。『寒椿』では、悦子の視点から、「仕込みの子」の貞子の実家がある裏長屋の貧困のすさまじさが、「じゅくじゅくと腐りかけたとぶ板を跨いで入ってゆくこの貧民長屋は、鼻がひん曲るほどの悪臭と汚穢おけいに充ち、悦子は初めてこの壁の落ちた一間きりの暮しと云うものを見たし、檻ぼろを被って寝ている病人や、戸口の脇に溢れた小便桶と竈かまどが並んでいるのも見て強い衝撃を受けたものであった」（『全集』第四卷、三三四頁）と描写される。

ちなみに、『權』では岩伍が金銭に執着を持たない人物であることが強調されており、『岩伍覚え書』では、語り手の岩伍が「これまで稼いだ金はほとんど右左裏町の人達のために使ってまいりまして、己の貯えと云うさもししい金の持ち合わせが御座いません」（同、三四頁）と述べる場面がある。他方で、綾子の視点で書かれる『春燈』や『朱夏』から判断する限り、富田家は控えめに言っても中流以上の裕福な生活を享受している。しかも、『満州』で極貧の生活を経験するまで綾子はそうした生活を自明のものと考えていた。^{*12}生まれた時から「お嬢さん」として育った綾子ほどではないにせよ、離婚するまで喜和も人並み以上の生活を享受していたことを考えるならば、喜和が「女街」の妻であることに對して強い罪悪感を表明することは気休めとも感じられる。

他方で、「玄人」の世界に対する喜和の嫌悪には金銭と性にまみれた世界に対する忌避感も混じっている。次男の健

太郎が中学校三年生になってから「素行の乱れ」が目立つようになり、喜和は健太郎の担任から呼び出しを受けるのだが、その際、担任が「お宅のお仕事柄」という言葉を口にしたことに強く反発する。

やがて喜和は、頻繁に外泊するようになった健太郎が、「親ほども年上の酌婦上りの年増」のハルと交際していることを知る。そこで喜和は、健太郎の「素行の乱れ」が、岩佐と取引関係のある楼主たちから「富田の若さん」と声をかけられ、「おひとついかが？」の勧めを鷹揚に受付けたところから始まったのではないかという疑いを持つようになる（同、一八九頁）。結局、健太郎は四年生に進級する前に退学処分となり、大阪の下駄屋の職人の丁稚奉公に出るものの長続きしない。しかし、その後、陽暉楼のお抱え運転手の職を得て真面目に仕事に励むようになり、周囲から上々の評判を得るまでになる。喜和は、そのことに安堵しつつも、「子供だけは堅気な仕事を持たせたかった」と思わずにはいられない（同、二二六頁）。

つまり、喜和は「玄人」の世界を墮落した世界として捉えるからこそ、自身や子供たちを「素人」の世界に囲い込むことに躍起になる。次節で見るように、こうした態度は喜和の娘の綾子にも共通している。

五 綾子・悦子——「女衞」の娘

本節では、『春燈』と『寒椿』を中心として、綾子・悦子が「素人／玄人」の境界をどのように捉えているのかを考察する。先述のとおり、『春燈』は、宮尾をモデルとする綾子が芸妓娼妓紹介業を営む家庭で子供時代を過ごし、女学校卒業後に国民学校の代用教員となるまでを描く作品である。『寒椿』は、宮尾をモデルとする悦子が小学校時代に一

つ屋根の下で暮らした四人の「仕込みの子」の人生をオムニバス形式で描く物語である。

『春燈』によれば、綾子が小学校二年生になる頃、綾子の家族は緑町から岩佐の取引先の陽暉楼に近い「海岸通り」に転居した。^{*13} 転居後まもなく「一つから三つまで年上の」四人の「仕込みの子」が家にやって来て綾子と同居するようになった。それ以来、綾子は「仕込みの子」たちと一緒に学校に通うようになった。

綾子は、まもなくこの家にやって来た一つから三つまで年上の四人の仕込みつ子たちと一緒に毎日学校へ通うようになったが、道は料亭陽暉楼のわきの坂を下って遊廓、稲荷新地を突っ切り、電車道に沿ってゆくのが近道とあって、軒を並べた妓楼の裏を抜けてゆくことになる。夏など、開け放った小部屋で赤い蒲団に客と一緒に寝ている女性たちの、ほとんど枕許に近い細道を通りながら綾子はそっち側へ決して視線を向けなかった。

遊廓がどんなところなのか知るよしもないけれど、緑町の頃の、家に屯ろしていた寄食人や男衆たちがあるとき突然、みだらな表情を浮べる折があるのを本能として嗅ぎ知っており、遊廓の金網のなかの、まるで動物園のような檻のなかに入っている女性は、男のその欲望的な目のいろと関わりがあるらしいとだけは判る。綾子だけでなく将来その女性と似た運命を辿る家の仕込みつ子たちもそんな話は誰もしなかったし、綾子同様、小部屋のなかをのぞき込みもしなかった（『全集』第二巻、三九—四〇頁）。

右の引用から、綾子が物理的には遊廓の内に足を踏み入れながら、遊廓の内と外を区別する境界を強く意識し、遊廓の外に身を置こうとしていることが読み取れる。なお『寒椿』には、悦子の家（松崎）の周辺の様子が、「播磨屋橋

から南、鏡川にかけての界限には山海楼、巴楼、蓼乃家、末広亭などの大きな料理屋と高知検番があつて、そのあいだを埋めるように大正の子方屋が軒を並べている」と書かれており（『全集』第四卷、一九八頁）、悦子の家（松崎）が花街のただ中に位置していることが示唆される。他方で、松崎については、「家の造りからして素人家だった」（同、一九八頁）、「よその子方屋から松崎の素人商売、と笑われるほど五人が仲睦まじかった」（同、二〇〇頁）と記されている。もっとも、四人の「仕込みの子」は芸妓になるための稽古を始めており、すでに「玄人」の世界に足を踏み入れていた。

悦子と仕込みの子たちの違いと云えば、仕込みつ子たちは一に稽古、悦子は勉強と定められている事で、澄子たちは近くの第一小学校から年中早退扱いでもって昼まで戻ると、お母さんに長袖の着物を出して貰って毎日舞と三味線の稽古に通う。四人の子が二階でいっせいに三味線のお凧いなど始めると、一人ぼっちの嫌いな悦子が寄つて来て触ったり声を出したりして邪魔をするとき、四人は四人とも威張つて、

「いらつ、悦子」

と頭からけんたいで怒鳴り、それでも止めないときは澄子が代表で、

「お母さあん」

と大声を挙げ、

「悦ちゃんがうちの稽古の邪魔するもの。怒つて頂戴」

と云い上げに駈け出してゆく。（同、一九九—二〇〇頁）

このように「素人／玄人」の境界は松崎（自伝四部作では富田）の家の内部にも存在しているが、「お父さん」（岩伍）は悦子（綾子）と「仕込みの子」を努めて平等に扱おうとした。「お父さん」は悦子と「仕込みの子」に同額の小遣いを与え、同じ食事の菜を与え、子供同士で寝るように言いつけた。しかしながら、「素人／玄人」の境界にこだわる「お母さん」（喜和）は岩伍の方針に従わず、悦子（綾子）を特別扱いした。『春燈』には次のような記述がある。

以前、仕込みっ子四人が家にいた頃、岩伍はつねに、綾子も四人と平等、といい、小遣いの高も一緒なら自分の部屋の掃除も同じように、寝るのも子供同士、と命じたが、何しろほとんど家にはいない岩伍の言葉は、喜和の「そんなことをしたら、綾子がむごい」の思いのために、大てい守られなかった。日曜の朝、四人とともに綾子も雑巾がけをしようとすると、喜和はいつも目くばせをしてとどめ、夜、皆の寢床へもぐり込んでみると、必ず起しにやってくる（『全集』第二巻、一二三頁）。

『寒椿』では、悦子を「特別扱い」する「お母さん」の態度が「仕込みの子」の視点から批判的に捉え返される。二章では、山海楼から「満州」の大斗楼に住み替えるまで松崎に滞在した民江が、「お母さん」が女学校入学試験を控えた悦子にかりきりになっている様子を目にして苛立ちを覚え、かつての差別待遇を思い起こす場面もある。

それでは、悦子（綾子）は自身と「仕込みの子」の関係をどのように捉えていたのだろうか。『權』では喜和の視点から、「仕込みの子」たちが家に来た時、「家中で一番喜んで迎へた」のが綾子であったこと、五人が集まると「仔犬がじゃれ合うよう」に仲良く遊んでいること、綾子が喜和よりも「仕込みの子」と眠るのを好んでいることなどが語

られる。

他方で『春燈』では、綾子の視点から、「姉妹は仲良く、一つのは平等に分けて、苦しいことは助け合うて、お互いの悪口をいわんように」という岩佐の言葉について、「少しも身に沁みなかった」と回想される。さらに、「自分はこの家の主人の娘で、将来芸者になる仕込みつ子とは姉妹なんかじゃない、いつも思った」ことが暴露される(『全集』第二巻、一七二頁)。

とはいえ、当時の綾子は芸者が何であるのかを理解していたわけではなかったし、「仕込みの子」たちが「みじめだとか、むごいとかの感想を持ったことはないし、その身の上を嫌悪したという覚えもな」かった(同、九三頁)。にもかかわらず、綾子は「こういう家に育った子の極めて本能的な警戒心」から「芸者になること」を「身震いするほど恐ろしい」と感じていた(同、九三―九四頁)。逆に言えば、綾子は、芸妓や娼妓の仕事について知る以前から「素人／玄人」の境界を内面化していたということになる。しかも綾子は、一つ屋根の下で生活する「仕込みの子」が、いずれ「玄人」の世界で生きること十分に理解していた。

他方で、綾子(悦子)は、成長するにつれて芸妓娼妓紹介業の家の娘として生まれたことを恥じるようになる。最初のきっかけは小学校二年生の時の家庭訪問だった。綾子は、担任の先生が店の看板を目にとめ、「バンカンが見えるよる、バンカンが見えよる」と繰り返し返すの聞き、「先生の言葉の奥底にひそんでいるものを敏感に感じ取り、ああやっぱりそうだったのか」と合点する(同、四一―四二頁)。次のきっかけは、第一高女の入試に失敗した時、入試にパスした友人の山原好子から、綾子が不合格になったのは家の商売が原因だと聞かされたことである。さらに女師付属時代になると、綾子は「今日お前の受持の中西先生がおいでつかされた。先生もお前には困り入っておられるそうな」

（同、一八七頁）という岩佐の言葉から、中西先生が「お宅のご職業がご職業ですから」（同、一八八頁）という言葉を連発しつつ自分の反抗的な態度を岩佐に報告したのではないかと推測する。このことは、健太郎の中学校の担任が健太郎の「素行の乱れ」について喜世に報告する際、「お宅のお仕事柄」という言葉を発したことを思い起こさせる。つまり、綾子や喜和がどれほど自身を「素人」の側に位置づけようとも、他人の目から見れば、「女街」の家族である綾子と喜和は「玄人」の世界の住人にほかならないのである。

『寒椿』によれば、こうした経験が重なるにつれて、悦子には「四人の仕込み子と一緒に住み、一緒に育った自分の境遇をまわりに隠したい思い」が募っていった（『全集』第四卷、二七一頁）。『寒椿』第三章では、「満州」からはるばる結婚祝いに帶と帶メを届けてくれ貞子に対してすげない態度をとったことが後悔の念と共に回想される。五〇代の悦子はその理由の一つを、「嫁ぐ相手の家が堅い職業である故に、芸妓などから祝い品を貰いたくない気持」にあったとしている（同、三二九頁）。

そもそも、悦子が結婚を急いだ理由は「松崎の家業から逃れたさ一心」（同、三三〇頁）だった。『春燈』では、元同僚の三好先生からプロポーズを受けた際の綾子の思いが、「三好先生ならちようどよい、職業は教師だし、家は農業、これほど堅い場所にかくまってもええこれから生涯、誰が自分を忌わしい家業の娘と思うだろう」（『全集』第二卷、三六七頁）と書かれている。つまり、綾子（悦子）は結婚という手段を通じて、自らを芸妓娼妓紹介業を営む父親と家、即ち「玄人」の世界から切り離そうとしたのである。

他方で、宮尾の自伝的作品には、少女時代の自分と「仕込みの子」の関係を反省的に捉え直す姿勢も見られる。『寒椿』では、五〇代になった悦子の観点から「仕込みの子」に対する自責の念がストレートに表明される。悦子は四人

の「仕込みの子」と暮らした「小学校一年から五年までの歲月」を「ひとつひとつ手繰ってゆけば懐かしいというよりは痛さに似た感情が先に立つて来る」と述べ、「ただでさえ幸せの薄い彼女たちに、何の弁えもなかった子供の悦子が辛く当りはしなかったかという疑い」を表明し、「彼女たちに恨まれれば恨まれるだけの根拠は充分ある」（『全集』第四卷、二四二頁）と吐露する。

もっとも、だからといって、悦子が「素人／玄人」の境界そのものを相対化しているとは言えない。『寒椿』第一章には、澄子が階段から落ちて大怪我をしたという報せを聞いた悦子が東京から見舞いにかけてつける場面がある。タクシーで病院に向かう途中、「もし澄子たち四人が普通の家に生れていて芸妓商売などする事がなかったら、今頃は果してどんな暮しをしていたらうか」（同、二五〇頁）という思いが何度も悦子の頭をよぎる。他方で、悦子は、「自分が彼女たちの立場でなく、まだしも松崎の子でよかった」、「これまでの浮き沈みのあいだには手段を選ばず金の欲しい時期もあったけれど、どう堕ちても男相手の商売だけは固くすまい、と思い、またそれを通せるだけの運のよさがあったのは、昔から世の中における彼女たちのみじめな位置が頭に沁み込んでいた為でもあったらう」と考えずにはいられない（同、二五〇頁）。

つまり、悦子において「遊女」にならざるを得なかった「仕込みの子」に対する同情と、自らが「遊女」にならずにすんだことについての安堵の気持ちは表裏一体である。そして、その根底には、女性の運命は「遊女」になるかどうかによって二分されるという強い思い込みが抜きがたく存在する。「素人／玄人」の二分法は悦子の心の中に揺るぎないものとして存在している。

六 岩伍・健太郎——「女衞」とその息子

本節では、まず「女衞」である岩伍による「素人／玄人」の境界をめぐる認識について、喜和や綾子（悦子）との比較を交えつつ検討する。その後、健太郎が「女衞」になるプロセスについて、同じく「女衞」の子である綾子との差異をふまえつつ考察する。

四節で論じたとおり、岩伍は芸妓娼妓紹介業に「人助け」の意義を見出していた。『岩伍覚え書』では、芸妓娼妓紹介業の存在意義が娼妓運動の批判を交えつつ雄弁に語られている。

私とて芸妓娼妓が決していい職業だとは思っておりませんが、高知市の貧民窟と具つぶさに関わりあつた経験のある人間なら、この実状のなかで娼妓運動を唱えるのは、貧乏人は皆首を縊って死ね、と云うに等しい事がお判りで御座いましょう。

（中略）

私、くどくどは御座いますが、人様から卑しめられるとは知りながらこう云う職につきましたのも、いささか考えるところが御座います故で、それは家のため親のため止むなく身を落す女達に少しでもいい条件が当りますよう、かつは阿漕な雇い主の監視と云う考えも加わっておりまして、及ばずながら今日まで非力の腕を振ふつてまいりました（『全集』第四巻、三二頁）。

売春が貧困女性にとっての命綱であり必要悪だというのは今日でも耳にする、ありふれた主張であるが、売春業者による自己正当化の論理として用いられることも少なくない^{*14}。もちろん前述のとおり、岩伍が良心的な「女衞」であることは事実である。とはいえ、たとえ極度に搾取的でないにしても、岩伍にとって芸妓娼妓紹介業は営利目的のビジネスであるし、『寒椿』や『岩伍覚え書』等に描かれる芸妓娼妓の状況は極めて過酷である。これらの点から判断して、芸妓娼妓紹介業が「人助け」だとする岩伍の主張は〈女衞〉による自己正当化であると言わざるを得ない。

他方で、岩伍において「素人」と「玄人」を差別化する姿勢は強くなかったように思われる。先述したように、岩伍（「お父さん」）は綾子（悦子）と四人の「仕込みの子」を可能な限り平等に扱おうとしたし、喜和の反対で実現しなかったものの、「仕込みの子」を養女にしようとさえした。

このような岩伍と喜和の間に見られる「素人／玄人」の境界をめぐる認識の相違について考える際、「玄人」のステイグマが性別によって異なる意味を持つことも考慮する必要がある。花柳界における「玄人」とは、通常は「遊女」のことを指す。それゆえに、「玄人」のレッテルは、「男性」よりも「女性」の場合に、はるかにネガティブな含意を持つステイグマとして機能する。

そもそも、綾子が「芸者に売られる」ことに強い不安を感じていたように、また五〇代の悦子が「遊女」にならずにすんだことを安堵したように、さらに『岩伍覚え書』の「満州往来について」において、腕利きの弁護士の娘である三姉妹が、父親が病に陥った後に「遊女」として身売りされたように、可能性のレベルでは、どんな女性も「遊女」になり得る（もちろん、実際には、女性が「遊女」になる可能性は出自や経済階層等によって大きく異なる）。

また、「玄人」のレッテルは、性的に奔放であるというイメージにも結びついているが、このイメージは、女性の場

合にのみステイグマとして機能する。『春燈』では、女学校時代の綾子が異性に対して徹底して禁欲的であろうとしたことが語られ、その理由が、「家業を蔑むならば、己れを蔑むに足る資格を持つていなければならず、その資格とは、男によるいささかの瑕瑾もあつてはならない自分なのであつた」（『全集』第二巻、二五八頁）と説明される。前節で詳しく見たとおり、綾子は「芸妓娼妓紹介業の娘」としてのレッテルを強く嫌悪していた。

言うまでもなく、こうした綾子の心持ちは、健太郎のそれとは大きく異なっている。作中では、健太郎が家業の芸妓娼妓紹介業をどう捉えていたのか書かれていないものの、強い忌避感を持つていたとは考えにくい。もし健太郎が家業に対して強い恥の意識を持ち、父親とは異なる人生を歩もうと固く決意していたならば、中学校において「素行の乱れ」を理由に退学処分を受ける羽目に陥ることはなかったであろう。しかも、健太郎は自分の意思で——健太郎と出会った時点で半玉であつたものの——「芸妓」だつた女性を妻に選んでいる。

ところで、喜和は中学校時代の健太郎が「親ほども年上の酌婦上りの年増女」と交際していることを知り、大きなショックを受けるが、岩伍は、「健太郎の事は放つて置け。／男が何処に居つて何をしようが構ふ事はない。学業だけちやんと続けて居つたらそれでええ」（『全集』第一巻、一八八頁）と言つて、健太郎の女性関係に頓着しない。このような岩伍の態度を喜和は次のように考える。

女親が男の子を一点異性として見る目があるやうに、男親は男の子に朋輩としての寛大さを、それも悪事を分け持つ朋輩の目で恕してでもあるものであらうか。家がかう云ふ商売なら、健太郎が物欲しげに新地を彷徨いてゐたとしても、さあ、さあ、と手招きして呼び上げ、心得て遊ばせるのが顔見知りの楼主たちの常識であり、そ

のつけを親に廻すどころか、万一間かれても知らぬ顔で押通す粋の利かせやうなら、岩伍は岩伍で、それと察した楼主の許へ、よい妓を選んで送り込むのであった（同、一八八―一八九頁）。

芸妓娼妓紹介業者と楼主は相互に取引関係を持つ「女衞」であるが、芸妓や娼妓と「遊ばせる」ことが業者間の接待となり得ることは想像に難くない。もつとも、右の引用において、楼主から接待を受けるのは岩伍ではなく、息子の健太郎である。健太郎は父親の取引相手の「女衞」によって「客」として女性を取引（交換）する男同士の関係の中に組み込まれ、やがて「女衞」になる。

『岩伍覚え書』には「満州往来について」と題した一篇があるが、岩伍はこの作品の中で、日中戦争勃発後に「満州」の取引が始まり一九四〇年にピークを迎えたこと、その間に富田家は「満州」全域の妓楼に多数の芸妓を送り込んだこと、長旅が困難になった岩伍に代わって若い健太郎が頻繁に「満州」を訪問したことが回想される。

ただこの男、私の躰が至りませんためか、渡満すれば必ず仕事を忘れ、楼主たちに勧められるまま、浦島のようにいくらでも遊び呆けるので御座います。私の営業日誌に依れば最高六十三日間も滞在し、気のいい男です故、その間帳場を手伝ったり楼主に奢られたり奢ったりでつつい腰が重くなるものと見え、私の矢継早の催促電報も犬に論語ほどの効き目もなかったようであります。その気になれば一城を潰すほどの豪奢な遊びも叶うと云う誘惑的な満州で、三十を出たばかりの若い者に用件だけで蜻蛉返りせよ、とまでの辛い事は申しませんが、妓楼に根を生やしたような仕事振りは私の信用にも関わろうと云うもので御座います（『全集』第四卷、一一二頁）。

右の引用中の「遊び」とは飲食のみでなく、「遊女」の性的サービスを享受することも含まれると考えられる。つまり、「女衞」同士が「奢ったり奢られたり」する関係は、「女衞」が男性であることを前提として成り立っている。

ところで右の引用は、「遊び」好きの健太郎に苦言を呈する形をとっているものの、同時に、岩伍にとって健太郎が頼もしいビジネス上のパートナーだったこともうかがわれる。岩伍が当初から健太郎に家業を継がせようと考えていたのかははっきりしないが、若くして楼主たちから「富田の若さん」として遇された健太郎が、岩伍の後ろ盾であった主人が経営する陽暉楼の運転手となり、やがて岩伍の仕事を手伝うようになるのは自然な流れと感ぜられる。

他方で、岩伍は娘の綾子を大学出の男性と結婚させて専業主婦にしたいと考えていた。岩伍は「女が外で働くなどもつての他^{※14}。女は家を守り、ええ子を育て、主^{あるじ}に仕えるのが道じゃ」と「事ある毎に口にし」（『全集』第二巻、二二六頁）て、綾子の大学進学に強く反対した。結婚相手の職業については、「月給取りや農業は富田家にはふさわしくない」（同、三三八頁）としか述べていないが、おそらく岩伍は綾子を「女人」つまり「女衞」の家庭に嫁がせるつもりはなかったであろう。

『春燈』には、綾子が、新京で妓楼を営む岩伍の友人の養女になりたいと主張した時に、岩伍が激しく動揺して拒絶の意思を示す場面がある。^{※16} 綾子は、この時、岩伍が「拒否した」理由について、「娘を妓楼^{あるじ}の主にしたくはないという潔癖感がまず働いたのではなかったろうか」、「職業に貴賤の別はない」／と胸を張るくせに、娘だけは別の世界に嫁がせたいという強い希望もあったか（同、二九三頁）と推し量っている。右の場面における岩伍の真意を特定することはできないものの、岩伍は綾子が「素人」の世界に止まることを望んでいた可能性が高い。芸妓娼妓紹介業に誇りを持っていた岩伍にして、娘の進路に関する限り「素人／女人」の境界意識と無縁ではなかったと言えるのではな

いだろうか。

七 おわりに

宮尾登美子の自伝的作品は、花街に生きる人々を分断するジェンダーや階級に基づく境界を鮮やかに浮かび上がらせているが、作品の内部でそれらの境界が相対化されているとは言えない。『寒椿』では、悦子が「仕込みの子」との関係を反省的に捉え直そうとするものの、「遊女」と「遊女」でない女性を二項対立的に捉える観点は自明のものとして残っている。

宮尾の自伝的作品に、「素人／玄人」の境界を少しでも動揺させる契機があるとすれば、それは岩佐と離婚した喜和がうどん屋の女将になる物語の展開に関わっている。岩佐との離婚にしぶ同意した喜和は、うどん屋の女将となった後、仕事に打ち込んで活力を取り戻す。作中では、喜和の心情が次のように語られている。

考へてみれば、長い間、岩佐から渡されるたつぷりの金を好きなやうに使ひ、富田の本妻としての面目を保つて来た身が、日々五錢拾錢の金の出し入れをし乍ら商ひする事の変りやうに自分ながら驚かぬでもなかつたけれど、いまはこれが生きてゆく手立てだと思えば商ひへの腰も据わり、面白味も湧いて来る。それに、喜和は、もう目の前で女の鉢の売買ひを見なくなつたのも一つの安堵でもあつた。(中略)。これですつかり素人の世界に戻つたと云へば思上りになるけれど、玄人社会の小粋さとは前を張る一方である事を考へれば、野暮と云はれても

かう云ふ裏のない商売の方が喜和にはずつと息がし易く思はれる。昔に較べて今が幸せとまでの気分にはまだ到底立到らないけれど、「日が葉、年が葉」と云ふ大貞の言葉は今も胸に生き少くともこれなら堪へられさうであった（『全集』第一巻、三八四頁）。

もちろん、右の引用に見られるように、喜和は離婚後も「素人／玄人」の境界に囚われ続けている。ただし、職業を持ち経済的に自立した喜和は、芸妓娼妓紹介業によって得た利益で贅沢な生活をしながら「女子の売買の上前を勿ね」ることに罪悪感を抱くような堂々巡りの状態からは解放されている。さらに喜和は額に汗して働く労働者となっている点で、かつての「女衞」の妻よりは「遊女」に近い立場にある。想像をたくましくするならば、今後、喜和と「仕込みの子」が、うどん屋の女将と客として出会い直すことがないとは言えない。

自伝四部作の四作目である『仁淀川』において、岩伍は空襲によって財産を失い、慎ましい暮らしをしている。戦争中、「外地」で働く「遊女」の手に配に奔走した岩伍は、敗戦によって国家に裏切られたという思いを抱き、芸妓娼妓紹介業からはキツパリと手を引いている。他方の喜和はうどん屋を再開し、客足も戻って忙しく立ち働いている。戦前から喜和の店が繁盛していることを知る岩伍は、内縁の妻の照と共にうどん屋を開く。照からうどん屋を開業する計画を聞いた綾子は、咄嗟に「岩伍は喜和の真似をしている」と考える。このような物語の展開から、職業を持つ女性として独り立ちした喜和の生き方を肯定するメッセージを読み取することは困難ではなからう。

注

*1 本稿では、娼妓、芸妓、酌婦などの性的サービスを伴う接客業に従事する女性性を「遊女」と総称する。なお、芸妓、芸者、娼妓などの言葉には差別的な含意が含まれることがあるが、本稿では歴史的用語としてそのまま用いている。読みやすさを考慮して括弧は用いない。

*2 拙稿「芝木好子『洲崎パラダイス』を読む——「廊」をめぐる境界の物語として」『昭和文学研究』第六二号、二〇二一年三月。

*3 『洲崎パラダイス』においても、「洲崎の女」には、作者の分身である「私」が経営者の友人を訪ねるために特飲街の店を訪問する場面がある。なお、女性作家の作品に、「遊女」を語り手・視点人物とする作品や客の視点から「遊女」を描く作品が存在しないわけではない。たとえば、林芙美子「牛肉」では、客の視点から「遊女」の転落の過程が捉えられている。拙稿「林芙美子「牛肉」論——「遊女」の転落物語」『北海道大学文学研究紀要』第一七五号、二〇二五年三月。

*4 小林裕子は「女」の目で見た虚飾の裏側——宮尾登美子が描く芸妓娼妓」岡野幸江・長谷川啓・渡邊澄子編『買売春と日本文学』、東京堂出版、二〇〇二年において、花柳界を描く宮尾の小説（『陽暉楼』を含む）を「性を買う側からでなく、売る側——特に娼妓の視点から描」いている点において高く評価している。本稿は小林の評価を否定するものではないが、宮尾の自伝的小説においてユニークかつプロブレマティックな点は、「売る側」にも「買う側」にも立ち得ない芸妓娼妓紹介業の妻と娘の視点を組み込んだ点にもあると考える。

*5 花街については、加藤政洋『花街 遊興空間の近代』講談社学芸文庫、二〇二四参照。

*6 以下の記述は、「浮き沈み五十年」『読売新聞』夕刊、一九八〇年六月二七日～七月一日『宮尾登美子全集』第十四巻、朝日新聞社、一九九三年所収、『宮尾登美子 年譜』『宮尾登美子 八十八年の生涯』改訂版、高知県立文学館、二〇一七年による。宮尾の人生については、大島信三『宮尾登美子 遅咲きの人生』芙蓉書房出版、二〇一六年も参照。

*7 本稿における宮尾登美子の作品からの引用は、『宮尾登美子全集』全十五巻、朝日新聞社、一九九二—一九九四年による。以下、『宮尾登美子全集』は『全集』と略記する。『』は改行箇所を示す。

*8 『権』第一部は一九七二年八月に私家版として刊行された（『展望』一九七三年七月号に掲載）。その後、一九七三年二月に上巻（第一部・第二部）、一九七四年三月に下巻（第三部・第四部）として書籍化された。『春燈』は『新潮』一九八五年八月号から一九八七

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

年一月号まで連載後、一九八八年一月に新潮社より書籍化された。『朱夏』は、一章および二章は『すばる』一九八〇年五月号から一九八一年二月号まで、三章以下は一九八三年新年特大号から一九八五年四月号まで連載後、一九八五年六月に集英社から上下巻として書籍化された。『仁淀川』は『新潮』一九九八年一月特大号から二〇〇〇年二月号まで連載後、二〇〇〇年十二月に新潮社より書籍化された。

*9 それぞれ『岩佐寛え書』のサブタイトルを付して『文芸展望』第一〇号（一九七五年七月）、同第二号（一九七六年一月）、同第一四号（一九七六年七月）、同第一五号（一九七六年一〇月）に掲載後、一九七七年一月に筑摩書房より書籍化された。

*10 『岩佐番外・鈴八のこと』（『ちくま』一九七七年四月）によれば、『岩佐寛え書』は、岩佐が丹念につけた十四冊の日記と営業日誌から話を拾い小説に構成したものである（『全集』第十四巻、二四二頁）。自伝四部作にも営業日誌への言及がある。

*11 『春椿』は『海』一九七六年新年特大号から二月特別号まで連載後、一九七七年四月に中央公論社から書籍化された。

*12 たとえば、女学校卒業後に代用教員として山間部の国民学校に赴任した綾子は、自分の着ている高価な服が周囲からどう見られているかを全く意識していなかった。また、綾子の給与は月額二四円であるにもかかわらず、一往復で十円近い交通費をもつとせず毎週実家に帰り、その度に照を通じて小遣いを「十円、二十円、と」受け取っていた。安居国民学校に転任後は、一ヶ月十七円の家賃の新築の家を「検分もせずに」借りることを決めた。さらに綾子は、岩佐と取引関係のあった涼月定の女将に対して頻繁に牛肉と卵を届けてもらうように頼んだため、女将から「あのねえ。先生はいつも肉と卵、肉と卵ばかりじゃが、肉と卵は大変なご馳走ですぞね。ここら辺りのひとは年に一回もたべやせん。先生は立派なお父さんが控えておいでで、お金に不自由のないことは判るけど、これではゆくゆく世帯は持ちませんよ。近所のひとの手前もある」とたしなめられた（『全集』第二巻、三六六頁）。

*13 この点は、ほぼ伝記的事実に基づいている。一九三四年三月末に海岸通り二丁目に引っ越しを行った宮尾の自宅の四軒隣には陽暉楼のモデルとなった得月楼本店が存在した。前掲大島「宮尾登美子 遅咲きの人生」。当時の宮尾の自宅周辺は稲荷新地（下知新地）と呼ばれる花街・遊廓街であり、玉水新地を指す「上の新地」に対して「下の新地」と呼ばれていた。「特集〇遊郭・玉水町今昔」『月刊土佐』一二号、一九八四年など。上村行彰編『日本遊里史』春曜堂、一九二九年の巻末に収録されている「日本全国遊廓一覽」の高知県の欄には玉水新地について貸座敷数二八、娼妓数二七九、下知新地について貸座敷数一四、娼妓数一二八との記述がある。高知県立図書館デジタルギャラリーに掲載されている「大高知市街地図」（一九三五年）には、得月楼と宮尾が通った高知市立昭和尋

常小学校の場所が記されている。’<https://kochibihri-project.org/detail/kochi-20170926-0027-0001?p=2> (二〇二五年四月一日最終閲覧)。

*14 映画『赤線地帯』（溝口健二監督、大映東京、一九五六年）には、売春防止法案が国会に上程される状況の下で、吉原の「夢の里」の主人が従業員たちに対して、「本当にお前たちのことを心配しているのは俺たち業者だ。こうやって店を作って商売させてるからお前たち食うには困らないし、一家心中だつてせずにすむんだ」と演説する場面がある。

*15 『権』には、健太郎が中学校を退学処分になった時、岩佐が健太郎に対して「阿呆な奴よ。その気になれや、大学まで行けたのに」と「怒気を露はに」する場面がある。『全集』第一巻、一九〇頁。

*16 この友人は「芸者上がりの女房」との間に子がなかったため、綾子に婿をとって後継ぎにする前提で、かねてから岩佐に対して綾子を養女に欲しいと熱心に乞うていた。